

薬史レター

日本薬史学会

J S H P



第 87 号

2021 年 9 月

日本薬史学会 2021 年会(千葉)のご案内

年会長 松崎桂一(日本大学薬学部教授)

COVID-19の影響で昨年中止しましたが、2年連続中止するわけにはいかないと考え、苦渋の選択ではありますが、本年はオンラインで実施いたします。

開催日：令和3年10月23日(土)

開催方法：ZOOMによるオンライン開催

薬史ツアー：実施しません

基調講演：COVID-19が、日本薬史学会に教えてくれていること

日本薬史学会会長 森本和滋

学術研究発表：一般の口頭講演のみの開催です(ポスター発表はありません)

講演申込：ホームページでは講演申込みメ切を9月4日としましたが、9月11日まで延長させていただきます。

年会参加の申込

全て事前登録となります。参加申込書(9月上旬より日本薬史学会HPよりダウンロードできます)

にご記入の上、年会事務局にお送りください。参加費は10月21日までにお振り込みください。

参加費

会 員：2,000円

非会員：3,000円

学生会員：無料

学生非会員：1,000円

主催 日本薬史学会

後援 日本大学薬学部

年会事務局 日本大学薬学部生薬学研究室

(千葉県船橋市習志野台7-7-1)

事務局長 矢作 忠弘

〒274-8555 千葉県船橋市習志野台
7-7-1

TEL 047-465-5356, 5487

FAX 047-465-5440

e-mail yakushi.chiba2021@gmail.com

日本薬史学会柴田フォーラム 開催中止のお知らせ

船山信次

2021年度の日本薬史学会・柴田フォーラムにつきまして、大阪にて11月実施をめざして準備を進めておりましたが中止とせざるを得ない状況となりましたので御報告申し上げます。

新型コロナウイルスの蔓延は深刻な状況となり、東京はもとより、大阪の新規感染者数も少な

くなる傾向はみられず、今後数ヶ月で完全に安心な状態になるとはとて考えられません。緊急事態宣言下、近距離の移動制限もされている状況です。

このフォーラムは講演会への参加とともに、講演会後の懇親会でのお互いの直接の交流もとても大切と考えます。今年10月の薬史学会総会がリモート

開催であることを考えますと、その一ヶ月後の11月の柴田フォーラムについては、懇親会の実施は初めから中止を考えざるを得ません。その上、講演会もリモートとなるとあえてこの時期に実施することの意義も薄れてしまうように感じます。そこで、ここはまことに無念ではありますが、今年は無理にフォーラムを開催せず、柴田フォーラムが懇親会も含めて安心して実施可能になる時期を待つことの方

がよろしいのではと考えました。大変に残念至極ではありますが、これらの状況から、今回は実施しないことと結論いたしました。何卒、事情を鑑み、ご了解いただけましたらありがたく存じます。

次会のフォーラムこそは安心して講演会が対面で開催され、懇親会も含めて盛況となることを祈念するところです。

(日本薬史学会・柴田フォーラム委員長)

薬史学会名誉会員に就任して

三澤美和

2021年4月に伝統ある日本薬史学会の名誉会員に推戴頂きました。身に余る栄誉であり心より御礼申し上げます。

顧みれば薬史学会へ入会したのは昭和末年の1988年2月、第3代野上 寿会長の時代でした。以来34年が経過し、1954年に先見の識をもって創立された薬史学会67年間の歴史のちょうど半分を見てまいりました。学会とともに歩んだこれまでの年月は多忙で哀楽に満ちたものでしたが、振り返ってみますと一炊の夢の如しと言えましょう。さしたる貢献はできませんでしたが、学会との接点を思い出して稿といたします。

1981年米国留学(カンサス大学)から帰ると、薬理学教授・柳浦才三先生と星薬科大学の学史編纂に取り組み始めた。夕刻から夜に10年間をかけて、1,400ページに及ぶ『星薬科大学八十年史』を刊行した。その過程で星薬科大学創立者星一が「人をつくる」として1911(明治44)年に星製薬株式会社を創立した年に社員に薬学・薬業教育を行い修了証書を与えていたことが判明し、同大学の創立年をずっと遡って明治末年に改めた。薬史学会年会が開始されていなかった1984年日本薬学会第109年会薬史学部会で「星一言語録(その1): 親切第一」を発表し、以降長らく明治・大正・昭和の稀有な人物星一を世に伝えてきたのが薬史学会との出会いのはじめであった。

毎年のように発表を続けたのが目に留まったのか、1992年当時柴田承二会長時代に評議員にいただいた。1998年度薬史学会秋季講習会の世話

人となり、永井恒司・星薬科大学教授に「戦後薬学国際交流の活動から—FIP, FAPA, FAPA-CP—」を同大学において講演頂いた。2000年頃から当時薬史学会事務局という名称であったが、川瀬 清、山田光男、高橋 文、末廣雅也氏らと薬史学会執行部の会合に同席するようになった。2005年山川浩司会長時代に薬史学会常任理事制度が設置されると、常任理事に就任。『薬史学会通信』(現『薬史レター』)編集長として、同誌のサイズをB5からA4に改めた。また教授退任まで常任理事会を星薬科大学会議室で開催した。常任理事会議事録を毎回作成することに改め、その作成を2016年まで担当した。

2005年学会ロゴマーク制作が打ち出され応募。薬研と天秤と薬剤師をあしらった図案を作成し提出したところ、選ばれて学会のロゴマークとなり以降使用されている。同年四史学会(医・薬・獣医・歯)にて「星薬科大学創立者星一の生涯」を講演。

薬理学会の編集委員や理事を務めていた頃の2007年、当時他学会からみて相当に後れを取っているのを見て学会の近代化をはかるため、常置委員会制度の導入を提案し、準備した上でこの年より実施される。薬史学会広報委員長就任(～2012.3)。2010～2015年度総務委員長。常任理事会制度発足等を取り込んだ学会会則の大幅な改正、慶弔規程作成、学会賞を復活し同規定を作成。こうした一連の学会改革に関して山川会長、川瀬、高橋、末廣先生などには寛大な心で見守っていただいた。今日に至る学会の近代化が急速に進んだ。

2010年、第3回柴田フォーラム世話人として、星

薬科大学にて同会を開催。2012年4月～2016年3月、副会長・総務委員長兼任（津谷喜一郎会長時代）。この間に歴代役員・常置委員の年度毎のリスト、歴代年会開催の変遷、学会賞受賞者一覧、学会財務状況の変遷グラフなどを作成・記録・保存。

2016年2月津谷会長が病にて急遽辞任。3月まで会長代行。学会の財務逼迫からの再建策の策定、学会設立60周年募金活動の完了後、折原 裕新会長に執行部を引き継いだ。

2016～2021年現在、監事。2021年日本薬学会史

年表作成委員会副委員長。小清水敏昌同委員長とともに年表作成予算の適正化を行った。

薬史学雑誌掲載論文16報、薬学会薬史学部会・薬史学会年会・国際薬史学会発表46報。薬史学関連共著者として、『韓国薬史学関連論文集（薬史学雑誌・薬史レター1966-2013より）』、『薬学史事典』、『薬学の歴史 くすり・軟膏・毒物（訳本）』。

諸先生、諸先輩、皆様方には長い間たいへんお世話になりました。有難うございました。

名誉会員拝命に際して：薬史学会への期待

松本和男

本会名誉会員に推戴のお知らせは、晴天の霹靂でありました。八十路を少し越した筆者にとりましては重圧ではありますが、大変光栄に存じます。会長はじめ会員各位に深く感謝申し上げます。

この際、本会に入会した動機、その後に学んだこと、これからの期待などにつき述べさせていただきます。

筆者が50歳後半、アミノ酸化学の総説執筆、講演などの機会に際して、少し歴史を紐解いてみたところ、長井長義（1845生）、池田菊苗（1860生）、鈴木梅太郎（1874生）らの先達がドイツ留学を終え、日本でアミノ酸類の合成などに実績をあげていたことを知った。それ以来、日本の有機化学の歴史に興味を持つようになった。日本化学史学会に入会し、当時、大阪大学教授の芝哲夫先生から医薬・化学史につき指導いただいた。しばらくして、筆者の勤務先（田辺製薬）に本会・元会長の山川浩司先生（当時、東京理科大学教授）が同社顧問の東大名誉教授・菅澤重彦先生を訪問された折、「薬の道修町の歴史」が話題になり、筆者に「薬史学会の方が田辺製薬との関係が深いかも」と仰せられた。即、菅澤先生も「その通り」の一言で入会することになった。うっかりして手続きが遅れ、定年退職近くの1999年に入会させていただいた。第1報として、「ニッパス50年の歴史」の題で薬史学会誌（第36巻、2001）に掲載していただき、その後、理事（2007～2019）、常任理事（2010～2018）の立場でお世話になった。

この間に貴重な体験をした。一つは本学事務局での薬史学会誌の送付業務の手伝いであった。山川会長先生はもちろん、もっとご高齢の山田光男先生、川瀬清先生、末廣雅也先生、高橋文先生（全員：現名誉会員）方が、定期的の手弁当で封筒に宛名貼り、雑誌入れ、糊付けなど、勤労奉仕をされているお姿に接し、頭が下がるおもいであった。それを機に若い会員と賛助会員を増やすべしと自らに問い、その後、何人かの入会者と何社かへ賛助会員の勧誘することになった。関西支部については、村岡修先生、辰野美紀先生、宮崎啓一先生らに協力いただいた。

上記作業中に学んだことも多い。先生方から湧き出る話題であった。例として、山田光男先生から、御父上（山田延男先生、1896生）がキューリ博士の研究に関与されていたことを耳にした。少年時代に熟読した偉人キューリ夫人伝記が身近になったような心境と共に、日本の偉人を日本人がもっと知り、先達に学ぶことと共に海外へもこのような情報提供することの必要性も感じた。先達に関しては、過去、「薬史学集談会」で色々と議論した時代があったことも耳にした。それが柴田フォーラム（命名は当時・津谷喜一郎副会長）につながる一因でもあった。

2008年に企画委員長を拝命し、企画委員会で上述の集団会に近い会合として、正式に「柴田フォーラム」を提案、可決され、初代の委員長に拝命された。柴田承二先生のお名前を使わせていただくことについては、山田光男先生に全面依頼した。その後も含

めて、会場などについては、三澤美和先生、塩川仁子先生、五位野政彦先生に全面的にお世話になった。なお、第1回目は、柴田承二先生からお話をいただくことになった。最初だけに、緊張と共に形式的になった感があり、その後も本来の語り合い(集談会)の雰囲気にならなかったことが反省点であった。今後は、各支部との連携も深めて気楽に「語り合う会」を期待したい。

「創立六十周年記念号」(2014年発行)に関与したことも善き経験であった。特集号編纂に関しては、相見則郎先生、小清水敏昌先生、平林敏彦先生、ジュリア・ヨング先生、吉岡龍藏先生はじめ多くの会員の先生に協力いただいた。記念号、特集号に関しては、数年以上の年月がかかる場合が多いだけに、若

い会員の参画を大いに期待したい。

最後に、若い会員に入会していただくためには、薬史学会においては伝統と共にイノベーションが必要かもしれません。幸いにして、現・執行部は、既にいろいろな場面で若い層に活躍の場をつくられているように感じております。先に例として、日本の偉大な先達の名前をあげましたが、日本語での国内誌では、国際的に情報を提供するには限度があると思います。これらの改善も期待したいと存じます。そのためには、名誉会員として、できる限り若手会員の活躍の下支えをさせていただき、薬史学会の存在を高めることに努力したい所存であります。今後とも、よろしく願いいたします。

役員新任・退任挨拶

広報委員長就任のご挨拶

伊藤美千穂

三田先生の後を引き継ぎ、広報を担当することになりました伊藤美千穂です。京都大学大学院薬学研究科で生薬・薬用植物を研究する分野の主任を務めています。広報はホームページの整備が主たる業務となりますが、近日中にスマホ対応、動画リンクなどを加えてより魅力的なホームページにグレードアップし、若い年代の新会員を増やす起爆剤にできるよう、努力したいと思います。よろしく願いいたします。

国際委員長・常任理事就任のご挨拶

但野恭一

これまで国際委員・評議員として本学会に参画しておりましたが、今年度より国際委員長・常任理事を務めさせていただくことになりました。海外の薬史学会との交流は大きな刺激となり、有益な情報入手につながります。コロナ禍の中、海外薬史学会のオンライン会議等への参加が容易になっていますので、開催案内と参加者からの情報提供を進め、HP英語サイトの充実も行っていきたいと思います。会

員の皆様のご協力をよろしく願いいたします。

広報委員新任のご挨拶

日向昌司

本年4月より、広報委員を拝命いたしました日向でございます。国立医薬品食品衛生研究所でバイオ医薬品の試験法に関する研究やバイオ医薬品情報のウェブサイトの管理を行っております。

森本先生が、生物薬品部やバイオ医薬品に関する論文をご執筆された際のご縁で、本学会で勉強させていただくこととなりました。微力ではございますが、先生方のご指導ご鞭撻を賜りつつ、広報委員として、少しでもお役に立てれば幸いです。

編集委員新任のご挨拶

武立啓子

歴史ある薬史学雑誌の多彩な論文表題と研究手法を目にするたびに、薬史学がカバーする領域の広さと深さに驚かされます。このたびその編集委員を務めさせていただくことになり、重責を感じております。微力ではありますが、学びの機会をいただいたと考えて取り組んで参りたいと思います。どうぞよ

ろしくお願い申し上げます。

これに伴い総務委員を退任させていただくことになりました。1年間ではありましたが、コロナ禍でのZoom会議の実現など、総務委員会の一員として新たなICT活用的一端も経験させていただきました。委員会の先生方に改めてお礼を申し上げます。

広報委員長退任のご挨拶

三田智文

2019年より2年間、広報委員長を務めさせて頂

きました。この間、日本薬史学会の先生方には様々にご指導を賜り、心より感謝いたしております。委員は退任いたしますが、引き続き一会員として薬史学を学んでゆきたいと考えております。今後ともご指導よろしくお願い申し上げます。末筆ではございますが、日本薬史学会の発展と皆様のご健勝を心より祈念いたしております。

アメリカ薬史学会 (AIHP)、国際薬史学会 (ISHP) Web参加報告

齋藤充生

2020年は新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の影響で、国内外の様々な会議が中止となった。一方、台頭したのがWeb会議である。いくつかのシステムがあり、それぞれの操作法を覚えるにはやや手間がかかるが、移動時間の必要なく参加できることは大きなメリットである。薬史学分野では、日本薬史学会同様に、国際薬史学会は中止 (延期) となったが、アメリカ薬史学会 (AIHP) の New Social History of Pharmacy and Pharmaceuticals Festival は Web 会議システムで実施された。2020年9月24日から29日 (現地時間) の5日間であり、アメリカだけでなく、ヨーロッパ、ラテンアメリカ、アジアなどのテーマもあり、分野も医薬品からワクチン、感染症、乱用薬物、アルコールに至るまで幅広く、歴史的イラストも添えられ楽しい雰囲気であった。ウィスコンシン大学薬学部がホストする Cisco WebEX システムで実施された。参加者は29ヶ国からの283名 (のべ1150名)。通信負荷軽減のため参加者の画像、マイクはオフだが、講演中にチャット機能で自由にコメント・質問を書くことができた。質疑は講演の最後に座長がまとめて読み上げ、演者が口頭で回答する方式で、回答に対する別のコメントがリアルタイムで書きこみまれ、新たな気づきからディスカッションが広がるなど、活発な議論であった。ネイティブスピーカーではない参加者としては、むしろ文章で質問ができたのは利点ともいえる。

サリドマイド事件で高名な FDA のケルシー博士伝記著者による動物愛護・福祉の講演は森本会長も聴講されており、チャットでケルシー博士に関する薬史学雑誌への投稿について紹介されていた。それに対するコメントとして、J-STAGE の、英文リンクを示すことができたのは編集委員長としての冥利に尽きることであった。書籍の著者による内容紹介「Book Talk」のコーナーは多く、コンパクトに内容がまとめられ、興味深かった。登場する研究者の層も人文系を含め厚く、日本薬史学会でも参考になる試みと思われた。会合後、主画面部分は YouTube 形式に変換され、AIHP の HP で無料公開されている (<https://aihp.org/new-social-history-festival/>)。

2021年5月からは AIHP 創設者の一人の Edward Kremers ウィスコンシン大薬学部教授にちなんだ Summer 2021 Kreminar - Opioids and Addiction がアメリカ歴史協会 (AHA) のアルコール・薬物学会 (ADHS) 等と共催で ZOOM 形式によりシリーズ開催された。新進気鋭の著者による書籍紹介やディスカッションなど見ごたえのあるものであった。録画も公開されている (<https://aihp.org/kreminar/summer-2021-opioids/>)。

2021年4月23～24日の国際薬史学会 (International Society for the History of Pharmacy: ISHP) のバーチャルシンポジウムは ZOOM 開催であった。質疑は基本的にチャットで行われ、座長が読み上げる形

式であった。

チェコの薬局方のラテン名の変遷（日本薬局方でも生薬でラテン名が残されている）、19世紀～20世紀のイタリアの女性向け健康小冊子（広告要素も強い）、ドイツ語圏の毒劇薬、麻薬処方箋画像情報のデータベース化などが紹介された。

また、アヘンの徐放剤（ミツロウ、砂糖）は16世紀ペルシアでラマダン対策として夜に服用すれば日中に効果があらわれることを目的に開発されたこと、

駆虫剤については現在の知見との比較、15～16世紀の船酔い薬は古代の処方の影響を受けていることなども報告された。興味深かったのは、コロナ禍で対面講義ができない中、薬史学の講義課題として、学生がTranskribusというソフト（時代、書体、地域を指定すれば手書き文字をテキスト化）を用いて3ヶ月で写本のテキスト化を成し遂げたというものである。コロナ禍でも研究の基盤は着々と整備されているようである。

海外の薬史学会の今（7）国際薬史アカデミーについて

国際委員会 辰野美紀

国際薬史アカデミー（IAHP（International Academy of the History of Pharmacy）、IAGP（Internationale Akademie für Geschichte der Pharmazie）、AIHP（Académie Internationale d'Histoire de la Pharmacie））（1952年創立）は、国際薬史学会（ISHP）が、一般的に各国単位の加盟であるのとは異なり、正会員と認証された個人のみでの入会、出席、発表が認められているクローズドな組織である。正会員としての入会は、国際薬史アカデミーの会員の2名の推薦状と著作3冊以上、論文7報位を提出した後、その内容が会員に公開され、それらがオリジナルな研究であることが認められると入会が認定され、ICHPの総会時に開催されるIAHP総会において、認定証明書と金メダル（写真添付）が授与される。現在の会長は、フランスのB.Bonnemain博士。名誉会長は、アメリカのG.Sonnedecker アメリカ薬史学会会長（2021年6月

死亡。享年103歳）、ドイツのW-D. Müller-Jahncke 元ドイツ薬局博物館館長、スペインのM.delC. F-Causape マドリード大学薬学部教授、イギリスのS.Anderson ロンドン大学熱帯医学研究所名誉教授である。日



金メダルの写真

本人の会員は3人。故清水藤太郎博士は、1971年チェコのプラハにて認証。故高橋文博士は、1999年イタリアのフィレンツェにて認証。私は2011年ドイツのベルリンにて認証を受けた。国際薬史アカデミーではCommunications誌を毎年2回発行し、会員の研究発表、論文、講演、受賞などの情報共有を行っている。（添付されている金メダルの図案は、ギリシャの医神アスクレピオスの娘であるヒゲイア（Hygeia）（衛生、健康の女神）である。）

〔Book紹介〕

石田純郎 著

世界の美しい病院 — その歴史

価格：本体2,500円＋税 ISBN：978-4-86069-643-6 C0047 初版：2021年5月25日

本学会石田純郎理事より学会宛に標記書籍を寄贈いただいた。雑誌「病院」、「大塚薬報」の連載記事を再構成したものとのことだが、著者が20年以上をかけて自らヨーロッパ、アジア、イスラム圏など世界各地の古代、中世、近代の病院を巡り、撮影を

行った貴重な記録である。その中には戦災などで元の姿を失ったものもある。

冒頭の通史解説のあと、歴史、地域別に各病院について、美しい写真と簡潔な解説で見開き2ページでまとめられ、病院の変遷が一目でわかるように

なっている。現在の町の様子や建物の見取り図、内部装飾の拡大写真なども添えられ、優秀なガイドと現地を訪れたような気分になる。

資料には取材旅行のコツも記載され、索引も充実しており、ガイドブックとしても秀逸な内容である。

本書に掲載されている様々な治療思想で建設された病院のなかには、現在も現役の病院として使用されているものもあり、病を癒すことへの人々の変わ

らぬ思いが見て取れる。

コロナ禍で海外旅行ができなくなって久しいが、美しい写真で心が癒され、またコロナ終息後の希望をもたらしてくれる一冊である。

(齋藤充生)



〔Book紹介〕

船山信次 著

「毒が変えた天平時代—藤原氏とかぐや姫の謎」

四六判 304頁 2,000円(原書房)

本書は、毒に関する多くの著作で知られる本学会船山信次常任理事が執筆、本年4月17日に上梓された。奇しくも同日開催の本学会公開講演会で「天平時代の毒と薬」と題して概要を講演いただき、その思いがけない展開に驚きをもって拝聴した。著者は1990年代に正倉院薬物の英文総説プロジェクトに関わったことが、天平時代に遣唐使がもたらした正倉院の毒や薬に興味を抱く契機になったと記している。天平時代(729～767年)とはその名に反して政争相次ぐ時代であり、本書ではこの間の暗殺事件に毒が関わったと指摘している。

この本は4つの章から構成され、第1章「天平の毒の正体—遣唐使と正倉院薬物」では、正倉院の治葛(gelsemine等の有毒アルカロイド含有)と雄黄(橙赤色・鶏卵大の硫化砒素、燃焼により無色・無臭で猛毒の亜砒酸 As_2O_3 を生成)に着目し、来歴も含めた綿密な調査により暗殺に用いられた毒物と推定している。

第2章「天平の幕開け—平城京遷都、長屋王の変、光明子の立后など」と第3章「天平の最盛期とその終焉—藤原四兄弟の台頭と死から称徳天皇の死まで」では、藤原不比等に始まる藤原一族(藤原四子や聖武天皇の母となる藤原宮子、光明皇后、孝謙・称徳天皇、藤原仲麻呂ら)が勢力を広げるなか、争いの原因となった宮子の隠された出自を巡って毒殺が繰り返され、737年藤原四兄弟の死は当時流行した痘瘡ではなく、744年の安積親王の毒殺とともに

藤原仲麻呂による雄黄を用いた毒殺事件であり、757年仲麻呂暗殺計画が未遂に終わった橘奈良麻呂の乱では、処刑に大量の治葛が使われたと推定している。さらに権勢を奮った藤原仲麻呂の終焉に至る経緯について、多くの資料に基づく説得力のある内容となっている。

第4章の「竹取物語に込められた秘密とかぐや姫の正体—竹取物語は告発の書だった」では、同時代の藤原一族の人々がモデルと推定し、かぐや姫のモデルも藤原宮子や孝謙天皇など美しく高貴な女性の合体であり、時の政権近くで政争の一部始終を目の当たりにしていた吉備真備こそ執筆者であろうと、おとぎ話と考えられてきた物語に独自の驚くべき推論を展開している。全編、推理小説の謎解きのような面白さがあり、つつい引き込まれて興味が尽きない。薬学関係者のみならず、古代史好きの方には是非一読されることをお勧めしたい。

天平時代には一方で、唐からもたらされた仏教經典から様々な仏像が造立されている。ことに東大寺の日光・月光菩薩像、戒壇堂の広目天像は、その高い精神性と静謐なたたずまいに心が洗われる思いがする。本書を拝読しながら、天平仏はこの動乱の時代にどのような眼差しを向けていたのかと思う。

(武立啓子)



薬史往来 日本の薬師如来像と薬壺

名城大学薬学部名誉教授 奥田 潤

仏像が朝鮮から日本へ紹介されたのは、538年（一説には552年）A.D.といわれている。中国の僧、不空（705～774年 A.D.）が、サンスクリット語の薬師如来の教典を漢語中国語に訳したが、その中で、薬師如来像には左手に薬壺をもたせると規定したため、日本では9世紀以降、多くの薬師如来像に後補の薬壺をもたせることになった。現存する重要文化財264像のうち191像が薬壺をもっている。

その薬壺は通常木の塊であって、入れ物の形をなしていない。ただ一例、山口県の周防国分寺の薬師如来像の薬壺のみが、その蓋の裏にある記載から、元禄十二年十月十二日（1699年10月12日）に薬壺をもたしたことが判明した。薬壺は中がくり抜かれ、絹の布に包まれた供物（220g）の上に小さな五輪塔が置かれていた。筆者らは、供物として穀物5種、生薬5種、鉱物6種を見出した。

穀物：米、大麦、小麦、大豆、小豆

生薬：石菖根、菖蒲根、丁子、人參、白檀
鉱物：水晶、紫色 青色鉛ガラス、炭酸カルシウム粒子、金箔、銀箔

今からおよそ300年前、同寺の住職、近くの住人は、どのような思いでこのような供物を薬師如来像に捧げたのであろうか。おそらく、穀物には翌年以降の豊作を、生薬には病人の回復を、鉱物には御利益を祈ったことであろう。

謝辞 本研究に御指導いただいた文化庁伊東史朗氏、周防国分寺住職福山秀道氏をはじめ、薬壺内蔵物の分析に協力いただいた名城大学薬学部野呂教授はじめ10名の協力者の方々に厚くお礼申し上げます。

- Ref. 1. 奥田 潤、久田陽一、奥田和代、川村智子、野呂征男、宮田雄史、薬史学雑誌、33、49～62、1998
2. Jun Okuda, Yukio Noro, Shirō Itō, Pharmacy in History, 41, 102～109, 1999
3. 佐藤洋一郎、椿坂恭代、吉崎昌一、奥田 潤、薬史学雑誌、35、128～134、2000

日本薬史学会編集委員会

編集委員長：齋藤 充生

編集委員：赤木 佳寿子 荒木 二夫 小林 哲 武立 啓子

薬史レター 第87号 2021年9月

編集人：齋藤 充生 発行人：森本 和滋

日本薬史学会 The Japanese Society for the History of Pharmacy (JSHP)

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (財)学会誌刊行センター内 日本薬史学会事務局

tel : 03-3817-5821 fax : 03-3817-5830 e-mail : yaku-shi@capj.or.jp http://yakushi.umin.jp

所属先、住所、アドレスなどの変更が生じた場合には、学会事務局へ必ずご連絡ください